慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済表の生成発展
Sub Title	
Author	渡辺, 建
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1944
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.38, No.2 (1944. 2) ,p.111(47)- 153(89)
JaLC DOI	10.14991/001.19440200-0047
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19440200-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

輓近に於ける企業組織及び自由競爭制度に於ける著大なる變化は全知なる經濟的動機の概念に相應する何等かの實在が存するか如何かを疑問たらしめた。曾つてアードルッフ・ヴグナーは經濟的指導動機を分つて、利己的及び非利己的と做し、更らに前者を(一)自己の經濟的利益に對する渴望と自己の經濟的窮乏に對する恐怖、(二)處罰の恐怖と賞與の希望、(三)名譽感、他人の倫理的是認並びに恥辱及び輕蔑の恐怖を包含する認識に對する渴望、並びに(四)職業欲、活動の快感等に分ち、又、後者を倫理的行爲に對する內心的命令の衝動力、責任感の快味及び自己の內心的非難、即ち良心の苛責に對する恐怖であり、其の純粹なる形態に於いては「至上命令」として現れるものと做した。(Lehr- und Handbuch der politischen Oekonomie, Erste Hauptabtheilung: Grundlegung der politischen Oekonomie, Erster Theil. 3. Aufl., 1893, S. 87.)。而して、輓近に至つて、ピイ・エッチ・ダグラスは經濟生活に於ける非商的動機の實在を論じて、人類に益せんとするの願望、仕事其の者の魅惑若しくは歡喜、手近かの仕事に自己の人格を具現せんとするの願望、同一活動範圍に於ける其の仲間によつて尊重せられんとするの願望、一般世人の尊重及び是認に對する願望、著名ならんとするの渴望、人及び物の上に支配力を有せんとするの願望を區別した。而も、斯くの如きものが其の全部を網羅するものでないことは言ふ迄もない所であらう。(R. G. Tugwell, The Trend of Economics, ch. v. P. H. Douglas, The Reality of Non-Commercial Incentives in Economic Life, 1924.)。

經濟表の生成發展

渡邊建

一

「王國の凡べての他の職業を支持し、それに活力を與へ、商業を繁昌せしめ、人口を增加し、製造工業を活氣づけ、國民の繁榮を支持するものは、農業が常に年々再生產する其原始的富である」。("OEuvres," p. 215)と思考せるルイ十五世の侍醫フランスワ・ケネエ François Quesnay は『大百科全書』の『穀物』Grains の項に於て、先づ佛蘭西の農業の基本をなす耕作地の年々の收穫の計算を試み、富める小作人 Fermier によりて行はるゝ大規模耕作が、僅かに六百萬アルパンの土地に限られ、貧しき分益農 Métayer の小規模耕作にて三千萬アルパンが耕作せらるゝ現狀にては其播種を除く總收益は、穀物の輸出が禁止せられ穀價が下落せる當時にて、五億九千五百萬（久保田明光敎授は『近世經濟學の生成過程』一八九頁の註に六億百八十萬と訂正するが筆者が正確に計算すれば六億三百萬）リーヴルに過ぎざることを指摘し、("Encyclopédie," t VII, p. 816: "OEuvres" p. 203)祖國が眞に强大となるために、農業の重要性が社會全般に認識せられ、それに使用さるゝ人と富とが、賦役や課稅から免除せられ、而も其收穫が國の內外にて自由に取引さるゝことが許可せらるゝ可きを主張し、斯くて佛蘭西の農業が再建せらるゝ時、

良地三千萬アルパンに大規模耕作が實施せられ、並地三千萬アルパンが其土地の狀況に從つて、夫々適當に投資經營せらるゝならば、其農產物は播種を除き十八億一千五百萬リーヴルとなり得べきものと算定した。而して其時、地主の純所得は四億リーヴル、租稅は一億六千五百萬リーヴル、十分ノ一稅は一億五千五百萬リーヴルとなり得ることを計算し、又小作人の利益は一億六千五百萬リーヴルとなると推算した。（"Encyclopédie," t. VII, p. 819 : "OEuvres," p. 214）

斯くて、ケネエは、地主の所得の支出によりて、年々同額の農產物が再生產せらるべき社會の分配・流通・消費・再生產即ち經濟の基本的機構を創案するの順序に到達したのである。

ケネエは『大百科全書』H項のために準備せる『人間』Hommes 論に於て、ドワズイ Doisy の一七五三年の著"Détail du Royaume de France" を引照して「今日、尙、佛蘭西に於ては、ローレンスを加へて約四百萬戶、即ち一戶平均四人として、約一千六百萬の人口を數へ得る。」ものと做し、デュプレ・ヅ・サンーマウル Dupré de Saint-Maur 及びブッフォン Buffon の生存期間の蓋然率に據りて、佛蘭西は

八百萬
四百萬　總人口　二千四百萬
一千二百萬

と計算した。而して『小作人』論にては「デュプレ・ヅ・サンーマウル氏に從へば（佛蘭西）王國には約一千六百萬人の住民ありと計算する。」（"OEuvres," p. 172）と述べ、『穀物』論にては「今日王國の人口を一千六百萬となす

二歲未滿のもの
二歲より十七歲迄のもの
成年者

者の意見を無視し得ない」。（"OEuvres," p. 245）と做すが、之は經濟學の考察の對象となるは生產・消費に關係ある人間の數であり、低年齡の兒童は消費に關係するのみであり、而も二歲以下のものはその消費も小さな對象に過ぎぬを以つて、これを除いたものである。（"Revue D'histoire des Doctrines économiques sociales, no. 1. 1908. p. 9）アダム・スミス Adam Smith が其不滅の書『國富論』（一七七六年）に「佛蘭西は約二千三百萬乃至二千四百萬の人口を有することは事實であらう。」と記述し、又、モオ Moheu が一七七八年に刊行せる "Recherches et considérations sur la population de la France" に出生を以て人口推算の最も安全なる出發點として、「佛蘭西に在りては、約二千三百五十萬乃至二千四百萬の住人を數へ得るものであり、計算による正確なる數は二千三百六十八萬七千四百九人となる。」（p. 65 : René Gonnard の飜刻せる一九一二年版 p. 38）と做せる點よりして、ケネエが記述するは、眞に當時の佛蘭西の人口と考へられしものである。而も、ケネエはこの四百萬戶が農業の再建せらるゝ時、地主階級として百萬戶、商工業の不生產階級として百萬戶、其雇傭する農業勞働者として百萬戶、即ち所謂、生產階級として、二百萬戶に區分せらるゝものとし、成年者のみを一戶平均三人として、一千二百萬人、二歲以下の幼齡者のみを除いて、一戶平均四人として、一千六百萬人と記述したのである。

（ケネエ手記の經濟表の註釋―岩波文庫『經濟表』三頁
（第二版經濟表『經濟表の說明』―岩波文庫『經濟表』二三頁）

斯くて、ケネエは、先づ「支出の秩序を餘り、複雜ならざらしめむが爲に」租稅と十分ノ一稅とを別に考察するものとして、（"Tableau OEconomique by F. Quesnay" p. iii : 岩波文庫『經濟表』二一頁參照）『穀物』論にて算定せる地主の純所得四億リーヴルを抽出し、之を「大なる數字を細分することによりて、表が餘りにも大となるを避けんが爲に」（"Philosophie rurale," t. I. p. 121 : "Élémens de la Philosophie rurale, p. 18, p. 45 參照）前記

の如く地主階級百萬戸とするを以て百萬分して、その四百リーヴルを、地主一戸の租稅納付後の平均所得とし、この所得を基本として、同額の再生産が年々可能となる諸階級の支出の秩序を表式せんと試みた。

マルモント Marmontel は、一七五七年に、既に、純收益の雁木型圖形即ち經濟表を描くに汲頭しつゝあるケネエを訪問せる旨を記錄してゐるが（"OEuvres," p. 142）一七五七、八年の間にケネエが手記せる地主の純所得四百リーヴルを基本とする經濟表は、ウキン大學のハアトマン Ludo Moritz Hartmann 博士よりチウリッヒ大學のスタン Alfred Stern 博士の暗示を傳へられたるバウエル Stephan Bauer により、巴里の國立文書保管所 Archives nationales. 所藏のミラボオ侯遺文書M七八四第一書束第二十三號文書として一八八九年に發見せられた。（この發見は、一般に一八九〇年とせらるゝが、これに力を得て更に巴里の國立圖書館 Bibliothéque nationale 保管の草稿類を檢索して、ケネエが『大百科全書』のH項のために準備せる『人間』論の一寫本を探し出せるをバウエル自身、一八八九年と『經濟學說史雜誌』"Revue d'histoire des doctrines économiques et sociales," no. 1. 1908, p. 3 に誌せることより考察して、經濟表の發見は、遲くもこの以前、一八八九年中と考へられる。）

經濟表初版の原稿と推定せらるゝこの文書は兩側に註釋を附せる Tableau OEconomique と題せる表と備考 Remarques 二十二項を記せるものであるが其經濟表のみは一九〇二年、オンケンの『經濟學史』Geschichte National Ökonomie, (S. 324－5) に複寫挿入せられ、それは吾が國に在りては、昭和八年增井幸雄博士によりて邦譯せられて岩波文庫九五一『ケネー經濟表』卷頭（三頁）に掲載せらる。

一七五八年マリヴエル Marivelt と協力して、各地方のアカデミーや、其他識者の組織する諸協會に向つて、佛蘭西の諸事情に就ての二百二十八項の『興味ある諸質問』"Questions intéressantes sur la population, l'agriculture et le commerce," ("L'Ami des Hommes" t. IV. vol. II, á la suite du Résumé) を提出して、ウォルスWeulersse が述べる如く「自己の思想を愼重に普及せしむる一つの手段」となせるケネエは、この質問の目的や其意義を正しく理解せしめんとして、年餘の苦心の結果、創案せる佛蘭西の農業再建後の經濟的基本秩序を表式せるこの經濟表を同年十二月、ヴエルサイユ宮殿内の印刷所にて試刷し、之を當時、マルモント Marmontel の主宰せる官報『佛蘭西の使徒』"Le Mercure de France" に發表せんと企圖せるものと推察せらる。彼の「最大の弟子」と呼ばるゝチユルゴオ Anne-Robert-Jacques Turgot はケネエが斯く祖國に對して行へる處を後年模倣して、歸國する支那の二青年學徒、高類思 Ko. 楊德望 Yong とに、『支那に就ての諸質問』"Questions sur la Chine, adressé à deux Chinois" と、この質問の意味を正しく理解せしむるがために、社會の勞働の分析並に富の分配に就ての一論稿、即ち後の『富の形成と分配に關する省察』"Réflexions sur la formation et la distribution des richesses" を與へたのであるが、この間の事情に就て、チユルゴオは一七六六年十二月九日デュポン Dupont de Nemours に「その稿に於て、余は代數學（計算の意味）を記述するを欲せず、且又、そこには、形而上學的の經濟表を挿入することがない。」("OEuvres de Turgot" par Schelle, t. II. p. 519) と書信して居る。

而も、この經濟表初版は、ミラボオ侯やデュポンの說く處に據れば、ルヰ十五世の面前で印刷せられたものであり、フウシイ Grand-jean de Fouchy の說としては、王の命令によりて印刷せられ、而も其數部は王自身印刷せられたものであり、（"Éloge de Quesnay" p. 34—"OEuvres," p. 127. note）更に又、ラヴエルニユ Léonie de Lavergne に從へば、其一部は、王自身の使用に當てられたものであるが、（"Les économistes français du dix—huitieme siecle, Paris. 1870," p. 66) ボオレオ Abbé Baudeau が「豪華なる版」magnifique édition と稱し、デュポンが

「甚だ美麗なる版」 très belle édition と誌せる經濟表のこの初版本は、オンケンの說にては、首相候補自薦運動失敗の痕跡を消滅せんがため（"OEuvres," p. 129) 又、シェル、Gustave Schelle の意見にては、『租稅論』"Théorie de l'Impôt" のため、ミラボオ侯が告發せられしことより、（"le Docteur" p. 282) 恐らく、ケネェ自身、之を回收し破棄し、其家庭内にも一部も止めない迄に嚴重に湮滅せられたものと傳へられる。

從つて、現在、經濟表初版の內容は斷定し得ないが、前記ケネェ手記の原稿と、經濟表第二版本、並にケネェのミラボオ侯宛書簡（巴里、國立文書保管所、ミラボオ侯遺文書M 七八四、第一書束第二十二號文書 "Economic Journal, voe. V. march, 1895," p. 20) より推察すれば、地主の所得四百リーヴルを基本とする Tableau OEconomique と題するヽ前記原稿の二十二項の『備考』Remarques とであると考へられ、各階級の諸支出の基本となる地主の所得が六百リーヴルに修正せられ『スュリー氏王國經濟の拔萃』が二十三項に一項追補せられた差異を除外すれば、經濟表第二版本の後半、即ち活版刷の表 Tableau OEconomique 以下の部分（岩波文庫『經濟表』三三—四二頁）であると推定し得る。

『穀物』論にて算定せる佛蘭西の農業再建後の地主の純所得四億リーヴルを百萬分して、ケネェは地主一戶平均の純所得四百リーヴルを基本として、經濟表を手記し、これを經濟表の初版として試刷せるものと推考すれば其前提とする處は『穀物』論に記述せられたる佛蘭西の農業再建狀態であるが、更に、經濟表第二版の『經濟表の說明』並にミラボオ侯の『租稅論』及び『經濟表と其解說』を參照しつヽ、詳細に檢討する時は、『穀物』論の計算と若干の差異あるものと考へねばならぬ。『穀物』論にては、地主の純所得を四億リーヴルとするも、租稅は一億六千五百萬リーヴル、十分ノ一稅は一億五千五百萬リーヴルと計算する。然しながらミラボオ侯の『租稅論』に記述さるヽ佛蘭西の農業再建狀態の計算にて知らるヽ如く、經濟表の計算に在りては、地主の純所得を四億リーヴルとせば、租稅は二億リーヴルであり、十分ノ一稅は一億リーヴルとせねばならぬ。從つて、租稅及び十分ノ一稅を考慮に入るヽ時、全國の地主階級の所得總額は七億リーヴルとなり、斯くて又、之を地主階級百萬戶にて除して、地主一戶平均の所得七百リーヴルを基本とする經濟表も描き得ることヽなる。（ミラボオ侯『人間の友』第七篇『經濟表と其解說』四二—四三頁挿入其第二表參照）

先づ、「支出の秩序を餘りに複雜ならざらしめむが爲に」（"Tableau OEconomique by F. Quesnay" p. iii: 岩波文庫『經濟表』二一頁參照）租稅と十分ノ一稅と、投資の利子を除く、地主の一戶平均の純所得四百リーヴルを基本とする經濟表の前提は、小作人一家の平均年投資四百リーヴルを以つて、年々再生產せらるヽ、年投資の回收四百リーヴルと其年投資の十割の純收穫四百リーヴルとの合計八百リーヴルの農產物であり、全國として八億リーヴルの再生產額である。更に、租稅、十分ノ一稅を計算に入るヽ時は、小作人一家の平均年投資七百リーヴルを以つて、年々再生產せらるヽ、年投資の回收としての七百リーヴルと純收穫としての七百リーヴルとの合計一千四百リーヴル、即ち全國小作人百萬戶の十四億リーヴルの農產物再生產が其計算の基礎となるものである。

次に、投資の利子を算出するに、先づ、ミラボオ侯が其『經濟表と其解說』にて論述する如く其前提とする佛蘭西の農業の再建狀態を大規模耕作地と其他の土地とに分ちて考察するに、經濟表初版に在りては、『穀物』論の記述の如く、佛蘭西の良地三千萬アルパンに大規模耕作が實施せられ、並地三千萬アルパンが土地の狀態に從ひ最も有

利に使用せらるゝ農業再建狀態を前提とするものと考へられる。

(一)大規模耕作地三千萬アルパンの投資

ケネエは、『小作人』論に、大規模耕作地百二十アルパンにて、馬の鋤一挺を備へて第一回の收穫に先だつ二ケ年間の諸費用、即ち其原投資を一萬八百リーヴル（"OEuvres," p. 178）と做すが經濟表に在りては之を一萬リーヴルと算定する。（"T.bleau OEonomique by F. Quesnay," p. vi: 岩波文庫『經濟表』二四頁）從つて、耕地三千萬アルパンに使用せらるゝ馬の鋤二十五萬挺の原投資は二十五億リーヴルとなる。

次に、馬の鋤一挺の年々の費用は、『小作人』論にては三千九百十（筆者が正確に計算すれば三千九百）リーヴルと計算さるゝが（"Encyclopédie," t. VI. p. 535: "OEuvres," p. 179）之より小作料、租稅並に投資の利子を控除し、小作人の利益即ち生活費を加算すれば二千七十七リーヴルとなる。

從つて、經濟表にありては、ミラボオ侯の『經濟表と其解說』に論述せらるゝ如く、之を二千百リーヴルと算出するものと推定し得る。故に耕地三千萬アルパンに要する馬の鋤二十五萬挺の年投資は五億二千五百萬リーヴルとなる。

(二)並地三千萬アルパンの投資、

並地三千萬アルパンの原投資は良地三千萬アルパンに實施せらるゝ大規模耕作の原投資二十五億リーヴルの半ば、十二億五千萬リーヴルとし、年投資は、其總額七億リーヴルより前記の大規模耕作の年投資五億二千五百萬リーヴルを除く一億七千五百萬リーヴルと算定し得る。

(三)佛蘭西の土地六千萬アルパンの收益

先づ、年投資の利子のみを計上して、其收益を算出するに、良地の大規模耕作地三千萬アルパンの總收益は、年支出（年投資五億二千五百萬、其利子五千二百五十萬）の回收として、五億七千七百五十萬、純收益として五億二千五百萬、計十一億二百五十萬リーヴルであり、並地三千萬アルパンの總收益は年支出（年投資一萬七千五百萬、其利子一千七百五十萬）の回收として、一億九千二百五十萬、純收益として一億七千五百萬、計三億六千七百五十萬リーヴルであり、この並地の總收益は、同面積の良地の總收益の三分ノ一となる。既にケネエは、『穀物』論にて、「これ等（並地）三千萬アルパンの種々の農產物を評價するは困難である。然し、大部分のものは多額の經費を要しないが故に、大いなる誤りを冒すことなくして、平均して、他の（良地）三千萬アルパンの農產物の三分ノ一として見積る。」（"Encyclopédie," t. VII. p. 819: "OEuvres," p. 213）ものと做す。從つて、年投資の利子のみを計算に入るゝ時、佛蘭西の土地六千萬アルパンの總收益は十四億七千萬リーヴルとなり、其內、大規模耕作の鋤の勞働によりて取得さるゝものは其四分ノ三となる。（後述する如く經濟表第二版に於ては、大規模耕作が佛蘭西の當時の耕地四千萬アルパンに實施せらるゝものと做し、其收益は收益總額の三分ノ二とす。"Tableau OEconom que by F. Quesnay," p. v: 岩波文庫『經濟表』一二三頁參照）

次に、原投資の利子を考察するに、並地の牧場・葡萄園・池沼・森林等の原投資は小作人の側に於て投下するは、極めて僅少であり、主として地主の行ふものと解せらるゝが故に（"Tableau OEconomique," p. vii: 岩波文庫『經濟表』一二五頁參照）其利子は小作人の負擔とならざるものであり、從つて、其年支出の內に加算せらるゝは、良地の大規模耕作の原投資の利子二億五千萬リーヴルのみである。

斯くて、良地の大規模耕作地三千萬アルパンの總收益は、其年支出（年投資五億二千五百萬、原投資の利子二億

五千萬、年投資の利子、五千二百五十萬）の回收として八億二千七百五十萬、純收益として五億二千五百萬、計十三億五千二百五十萬リーヴルであり、並地三千萬アルパンの總收益は其年支出（年投資一億七千五百萬、其利子一千七百五十萬）の回收として一億九千二百五十萬、純收益として一億七千五百萬、計三億六千七百五十萬リーヴルであり、從つて、佛蘭西の六千萬アルパンの土地より生ずる總收益は十七億二千萬リーヴルとなる。

斯くの如く、經濟表第二版の『經濟表の說明』並に、ミラボオ侯の『經濟表と其解說』を參照しつゝ經濟表初版の前提とする佛蘭西農業の再建狀態を推定すれば其投資並びに收益は次の如くゝ更に、之を『穀物』論の數字と比較すれば次表の如くなる。

	『穀　物』論	經濟表初版	其內譯	
投資と收益	土地六千萬アルパン	良地大規模耕作地三千萬アルパン	其他收益ある並地三千萬アルパン	
年支出	投資　三十七億五千萬	五億二千五百萬	一億七千五百萬	
	利子　三億七千五百萬	三億二百五十萬	一千七百五十萬	
原投資利子		二億五千萬		
年投資利子		七千萬		
年支出	十億九千五百萬	十億二千萬	一千七百五十萬	(2)
總收益	十八億一千五百萬	八億二千七百五十萬	一億九千二百五十萬	
總收益	年支出回收 十億九千五百萬	十三億五千二百五十萬	三億六千七百五十萬	
純收益	七億二千萬	八億二千七百五十萬	一億九千二百五十萬	
		五億二千五百萬	一億七千五百萬	

地主所得階級	地主純所得	四　億	三　億	一　億
	租　稅	一億六千五百萬	一億五千萬	五千萬
	十分ノ一稅	一億五千五百萬	一　億	七千五百萬

註　(1)『穀物』論の計算より筆者は、原投資並に年投資を推定し、原投資の一割の利子を年支出の一部にしたのであるが、經濟表初版にては、並地の森林・葡萄園等の原投資十二億五千萬は地主階級の行ふものとして、その利子を農業經營者の年支出の中に加へずして、年投資七億の利子七千萬のみを大規模耕作の原投資の利子二億五千萬に加算する。

(2)『穀物』論にては、これを經費九億三千萬と小作人の利益、即ち其生活費一億六千五百萬とに分けて計上するが、ミラボオ侯『租稅論』の計算に準じて、この二者を合算する。

(3)『穀物』論にては、タイユ稅のみを計上して、前記の如くするも、後の經濟表の計算に在りては租稅は地主の純所得の二分ノ一とし、十分ノ一稅は更に租稅の二分ノ一とす。ミラボオ侯『租稅論』にても斯くの如き比率にて、地主階級の各所得を算出する。從つて、『穀物』論の場合七億二千萬となるべき地主階級の所得總額は經濟表初版に在りては、七億となり、從つて年投資も七億と推定し得、斯くて、總收益は『穀物』論にて十八億一千五百萬とせるが經濟表初版の前提とする佛蘭西農業の再建狀態にては十七億二千萬となるものと考へられる。

既述の如く、ケネエは支出の秩序を餘り複雜ならざらしめむが爲に、租稅、十分ノ一稅並に投資の利子を別に考察するものとして、前記の地主の純所得四億リーヴルのみを抽出し、之を斯くの如き『大なる數字の細分によりて表が餘りにも大となるを避くるがために』（"Philosophie rurale," t. I. p. 121; "Eléments," p. 18. p. 45）地主階級

百萬戸なるを以つて百萬分して、其一戸平均の純所得四百リーヴルを基本として、各階級の諸支出の秩序を示す經濟表を手記し、これを經濟表初版本の表 Tableau OEconomique とせるものと推定する。更にミラボオ侯『經濟表と其解說』の第二表より考察すれば、地主階級の總所得額七億リーヴルを採りて、其百萬分ノ一、七百リーヴルを基本とする經濟表も、この場合描き得るものと考へられる。

II

バウエルが前記のケネエ手記の經濟表と二十二の備考と共に、巴里の國立文書保管所のミラボオ侯遺文書M七八四、第一書束、第二十四號文書として發見せる經濟表は、其第二十二號の文書として保存せらるゝケネエのミラボオ侯宛書簡に據れば「更に一層明確に考察せんがために」ケネエ自ら印刷せる其第二版三部の內の一部であり、當時ベルヌの農業協會の懸賞論文に應募すべく農產物の價格問題に就て執筆しつゝあつたミラボオ侯に、其論文の附錄として役立たしめんとして、自ら校正して贈つたものである。之は一八九四年、ケネエ誕生二百年記念として「英國經濟協會」British Economic Association により て、寫眞を以つて翻刻せられ、"Tableau OEconomique by François Quesnay." と題して出版せられたが、吾が國に在りては、松崎藏之助博士によりて明治三十五年九月『經濟志叢』の第一篇として『經濟大觀』と題して邦譯せられた。更に昭和八年十一月に刊行せられた岩波文庫『ケネー經濟表』の前半、十七頁より四十二頁に增井幸雄博士によりて邦譯せられて居る。此の第二版の印刷は「英國經濟協會」版に附せられた『類書目錄』Bibliography には、一七五九年末となつて居るが、シエルは一七五九年の春と推定し、彼が偶、入手せる第三版を以つて、一七五九年の末に印刷せられたものと做す。("Revue d'Economie politique," 1905, p. 502.)

ケネエは、ミラボオ侯に宛てた書信に於て、この第二版は初版を增補し修正せる旨を傳へて居るが、如何に增補せられ、如何なる點が修正せられたであらうか。勿論、其初版本が發見せられない以上、的確に斷ずることは出來ぬが、前述の如き推定が許さるゝならば、增補された部分は第二版の前半、彫刻版刷の表 Tableau Économique と『經濟表の說明』十二頁即ち岩波文庫『經濟表』の十七頁より三十二頁の部分であり、修正せるは、初版の表の基本となれる地主の純所得四百リーヴルを第二版に於ては六百リーヴルとなせる點に基くものである。ケネエは「四百リーヴルの所得の配分は、餘りに、社會各員の割り前を少額ならしめ、それは、不幸を補はんがために、何等の補力劑を與へることなくして、放血及び斷食の處置を行ふ醫者に指圖せらるゝに至つた虛脫羸瘦せる王國の最も貧窮なる國民を想起せしむる」が故に、「第二版に於ては、凡べて、この人々に、其配分を少しく多くせんがために」基本とする所得を六百リーヴルとせる旨をミラボオ侯に書き送つてゐる。(Economic Journal, vol. V. march 1895, p. 21)

而も、ケネエは、この所得六百リーヴルを以つて一家は「安易の中に生活」(Tableau OEconomique by F. Quesnay, p. viii: 岩波文庫『經濟表』二六頁) し得るものと考へたが、チュルゴオは一七七五年の『自治政體案』"Memoire sur les Municipalités(OEuvres de Turgot, éd. par Schelle, t. IV 1922, p. 568—628) に於て國會に相當する王國總市民會議 Municipalité générale du royaume の議員の選擧權及び被選擧權に就き論じて、地主にて一家族を維持し得る人、即ち土地から六百リーヴルの所得を收得する人を完全なる一市民權を有するものとし、これを選擧權及び被選擧權の基本的單位と提案せることより推察して、當時の社會に於て、地主一家の所得として六百リーヴルが適當のものであつたと考へられる。

又、偶然シェルが手に入れる經濟表第三版本は、其第二版と同じく四折判であるが、體裁に於て劣り、内容に於て豊富となれるもので、それは巻頭に六百リーヴルの地主の所得を基本とする彫刻版刷の表を掲げ、『經濟表の說明』十二頁を附し、更に次に『スユリー氏王國經濟の抜萃』二十四箇條と其註釋とで二十二頁を有するものである。之を經濟表の第二版本と比較すれば、第二版で新たに增補せられたものと推定せる部分は全く第二版そのまゝであり、初版の形體にて第二版に添附されたものと推定せる部分に於て、訂正增補が行はれたもので、先づ兩側に註釋が附せらるゝ活版刷の表は削除せられ、其後の『スユリー氏王國經濟の抜萃』の第二十一條、即ち後の『フィジオクラシイ』"Physiocratie" に編纂された『農業國の經濟的統治の一般原則』の第十五（"Physiocratie" t. I. p. 114—115）が增加されて二十四箇條となり、他のものも夫々追加せられ、就中、註釋は著しく增加せられて、第二版に在りては、僅かに六頁であつたものが二十二頁に增補せられたのである。而も第二版をミラボオ侯に贈るに際してケネエがペンで修正せる箇所は一部は訂正して印刷され、一部は正誤表に印刷して添附せられたのである。フォルボンネ F. V'éron de Forbonnais が其の "Principes et Observations OEconomiques" に、又デュポンが『摘要錄』Notice abrégée に、『スユリー氏王國經濟の抜萃』の箇條を二十四項と記述する處より考察して、經濟表が極めて限られたる人々の間に配布せられたるは、この第三版であり、恐らくミラボオ侯がデュポンに、經濟表の印刷を指したものと考へられる。（"OEuvres," p. 126, note）

一七七三年の冬、巴里のミラボオ侯爵邸に催された重農學徒の同年度最終の會合にて行はれたデュポンの講演（Karl Knies "Carl Friedrichs von Baden brieflicher Verker mit Mirabeau und Du pont, Heidelberg,1892." B. II. p. 108）に據れば、ケネエは一貴夫人—シェルの意見（Revue d'Économie Politique, 1905, p. 498: "le Docteur" p. 250—251）にては重農學徒の會食に於て常に其主人席に著いたバイユ Bailly 夫人—の慫慂によりて、官報佛蘭西の使徒』"Le Mercure de France" に經濟表を掲載するを斷念して、一七五七年七月の一夜、說得せし以來、彼の最初の又、最も熱心なる門弟となれるミラボオ侯の才筆にてこれを社會に紹介せんとし、先づ、其第二版の一部をベルヌの農業協會に提出するミラボオ侯の論稿に添附すべく贈つたのである。而して、このベルヌの農業協會に提出せる論稿を『人間の友』第五巻として刊行せるミラボオ侯は、改めて經濟表の解說を試みて『人間の友』第六巻の附錄としては『經濟表第二解說』"le Second Explication du Tableau Économique" と題し、又『人間の友』第七巻としては、『經濟表と其解說』"Tableau Économique avec ses Explications" と表題して出版した。一七六六年にはこの英譯書も "The Economical Table, on attempt towards ascertaining and exhibiting the source, progress, and employment of riches, with explanations by the Friend of Mankind, the celebrated Marquis de Mirabeau, translated from French." と題して刊行せられたが、クレール Clere は其著『禹大帝と孔子』"Yu, le grand et Confucius, Soisson, 1767" に於て、「英國人がこの著書の譯者に千ギーネの賞金を提供したと聞いても予は少しも之を怪しむものではない」と記述してゐる。

次に經濟表第二、第三版、及びミラボオ侯の『經濟表の解說』の前提とせる佛蘭西の農業再建狀態を考察するに、佛蘭西の領土、約二億二千萬アルパンの四分ノ一に當る良地三千萬アルパンに大規模耕作が實施せらるゝを基本として、經濟表初版の表に地主一家の平均純所得四百リーヴルとせるが、之を六百リーヴルと修正するにより

て、少くも其領土の三分ノ一に當る四千萬アルパンに大規模耕作の行はるゝを必要なりとする。（“Tableau OEconomique by F. Quesnay,” p. vi: 岩波文庫『經濟表』一三頁）而して、ミラボオ侯の『租稅論』に、當時の耕作地約四千萬アルパンとするが故に（“Théorie de l'impôt p. 198: p. 237）恐らく、この當時の耕作地の全部に大規模耕作が擴張せらるゝ如き農業再建の狀態を前提とせるものと考へられる。

（一）大規模耕作地四千萬アルパンの投資

大規模耕作地百二十アルパンを輪耕する馬の鋤一挺の原投資は一萬リーヴルであるが故に、四千萬アルパンに使用さるゝ馬の鋤三十三萬三千三百三十四挺の原投資は三十三億三千三百三十四萬リーヴルであり、其鋤一挺の年投資は二千百リーヴルであるを以つて其年投資額は七億リーヴルとなる。

（二）其他の土地二千萬アルパンの投資

主として、葡萄園・森林・秣場等として使用せらるゝこの土地は「小作人の側に於ける原投資を要求すること極めて僅少であり、此の原投資の價値は地主の負擔を以つて行はれる植樹・其他の事業の爲の原投資を含めて十億リーヴルに減ぜられ得る。」（“Tableau OEconomique by F. Quesnay” p. vii: 岩波文庫『經濟表』二五頁）ものと做す。而して、其年投資は大規模耕作地の年投資額の二分ノ一、三億五千萬リーヴルと算定せらるゝものと考へられる。

（三）佛蘭西の土地六千萬アルパンの收益

先づ、年投資の利子のみを計上して其收益を算出するに、大規模耕作地四千萬アルパンの總收益は、年支出（年投資七億、其利子七千萬）の回收として、七億七千萬、純收益として七億、計十四億七千萬リーヴルであり、其他

收益ある土地二千萬アルパンの總收益は年支出（年投資三億五千萬、其利子三千五百萬）の回收として、三億八千五百萬、純收益として三億五千萬、計七億三千五百萬リーヴルであり、前記の大規模耕作の總收益の二分ノ一となる。斯くて「多くの葡萄園・牧場・森林の多く存するが如き國に在りては鋤の勞働によりて取得さるゝは、この二十二億五百萬リーヴルの約三分ノ二に過ぎない。」（“Tableau OEconomique by F. Quesnay” p. v: L'Ami des Hommes t. VII. p. 64: 岩波文庫『經濟表』一三頁）と記述さる。但し、經濟表第二版の『經濟表の說明』に在りては、年投資十億五千萬リーヴルの一割の利子を一億一千萬リーヴルとして計算して、總收益を二十二億一千萬リーヴルに訂正する。

次に、原投資の利子を考察するに、主として牧場・葡萄園・池沼・森林等である耕作以外の收益ある土地二千萬アルパンの原投資は十億リーヴルと推算さるゝも、それは主として地主によりて投ぜらるゝものであり、從つて其の利子は農業經營者の年支出の內には加算せられないものである。故に、其年支出に計上せらるゝは、大規模耕作の原投資の利子三億三千三百三十三萬四千リーヴルである。又、經濟表第二版の『經濟表の說明』にては、原投資を三十三億三千三百三十四萬としながら、其一割の利子を三億三千三百三十二萬二千とせるも、ミラボオ侯の『經濟表と其解說』に在りては前記の如く其原投資の正確に一割とする。

斯くて、大規模耕作地四千萬アルパンの總收益は其年支出（年投資七億、原投資の利子三億三千三百三十三萬四千、年投資の利子七千萬）の回收として、十一億三百三十三萬四千、純收益として七億、計十八億三百三十三萬四千リーヴルであり、其他の收益ある土地二千萬アルパンの總收益は其年支出（年投資三億五千萬、其利子三千五百

萬)の回收として三億八千五百萬、純收益として三億五千萬、計七億三千五百萬リーヴルであり、從つて、佛蘭西の土地六千萬アルパンより生ずる總收益は二十五億三千八百三十三萬四千リーヴルとなる。但し既に注意せる如く、經濟表第二版に在りては、原投資並に年投資の利子を正確に夫々の一割とせずして、この總收益を二十五億四千三百三十二萬二千リーヴルと計算するも、ミラボオ侯の『經濟表と其解說』に在りては前記の如く訂正する。

斯くの如き、經濟表第二、第三版、並にミラボオ侯『經濟表と其解說』が前提とする佛蘭西の農業再建狀態を考察すれば其投資並に收益は次表の如くなる。

投資と收益	經濟表第二版	ミラボオ侯『經濟表と其解說』	其內譯
	土地　六千萬アルパン	土地　六千萬アルパン	大規模耕作地四千萬アルパン　其他の收益ある土地二千萬アルパン
原投資	四十三億三千三百三十四萬	四十三億三千三百三十四萬	十　億 (1)
年投資	十億五千萬	七　億	三億五千萬
年投資利子	四億四千三百三十二萬二千	四億三千三百三十三萬四千	三千五百萬
原投資利子	三億三千三百三十二萬二千	三億三千三百三十三萬四千	
年投資利子	一億一千萬	七千萬	三千五百萬
年支出	十四億九千三百三十二萬二千	十一億三百三十三萬四千	三億八千五百萬
總收益	二十五億三千三百三十三萬三千	十八億三百三十三萬四千	七億三千五百萬
總收益　年支出回收	十四億九千三百三十二萬二千	十一億三百三十三萬四千	三億八千五百萬
總收益　純收益	十億五千萬	七　億	三億五千萬

	地主純所得	六　億	四　億	二　億
地主所得階級	租　稅	三　億	二　億	一　億
	十分ノ一稅	一億五千萬	一　億	五千萬

註 (1)森林・葡萄園等の原投資十億は地主階級の行ふものと做して、其利子は農業經營者の支出の內に計上せず、從つて原投資の利子としては大規模耕作地六千萬アルパンの原投資三十三億三千三百三十四萬の一割の利子のみを計算す。

"L'Ami des Hommes" t. VII. p. 64-68

而して、ケネエは支出の秩序を餘り複雜ならざらしめむが爲に、租稅・十分ノ一稅並に投資の利子を別に考察するものとして前記の地主の純所得六億リーヴルのみを抽出し之を、斯くの如き「大なる數字の細分によりて表が餘りにも大となるを避くるがために」("Philosophie rurale" t. I. p. 121: "Elémens," p. 18. p. 45) 地主階級百萬戶なるを以つて百萬分して、其一戶平均の純所得六百リーヴルを基本として、各階級の諸支出の秩序を示めす經濟表を作成し、これを經濟表第二版の第一、第二表、第三版の一表、又ミラボオ侯『經濟表と其解說』の第一表とす。更に、『經濟表と其解說』第二表は、地主の純所得六億に、租稅三億、十分ノ一稅一億五千萬を加へた前表の地主階級の所得總額十億五千萬の百萬分ノ一たる一千五十リーヴルを基本とする。

尙、この『經濟表と其解說』には、諸經濟問題解決のために描ける經濟表四葉を挿入するが、佛蘭西の農業再建後の諸階級の支出秩序を表示するは以上二葉である。

三

斯く、經濟表はミラボオ侯によりて社會に紹介せられたのであるが、デュポンが一七六八年ミラボオ侯の

"Précis de l'ordre légal" の編輯者として、記述せる如く、當時の人々が經濟表といふ名稱に就て、又其著者たるケネエ個人に就て抱懷して居た偏見に加ふるに、「經濟表夫れ自體が、當時の一般的通說と全く反對の諸原理を餘りにも多く包含するものである」から、經濟表の思想は一般に承認せられなかつたのである。」("Précis de l'ordre légal-Avis de l'éditeur, p.4-5: Weulersse "Le Mouvement" t. I. p. 70) ミラボオ侯自身も彼のこの解說が經濟表を明瞭ならしむるよりも、寧ろそれを曖昧模稜たらしむるに役立つに過ぎなかつたことを自認し、("OEuvres," p. 306) 助力せるケネエもこれを自覺せるものゝやうである。(Revue d' Economie Politique, 1905. p. 499)

この『經濟表と其解說』の不評に反し、一七六〇年十二月に刊行せられたる『租稅論』は極めて好評を博し、當時あらゆる人に讀まれたと言はれ、デュポンは其『摘要錄』Notice abrégée に「この崇高なる著作 Cet ouvrage sublime は予の知る範圍に於て十八版を數へ得る」("OEuvres," p. 157) と記述する。

然しながら、他面同書に對する社會一般の好評は、この書に於て呪はるべき吸血鬼と目されたる徵稅請負人、金融業者等の怒りを招くことゝなり、彼等は遂に國王に訴へて、著者ミラボオ侯をヴンセンヌの城 Chateau de Vincennes に禁錮せしめた。オーセ夫人の記錄に據れば、この報に驚愕せるケネエは直ちに寵妃ポンパヅウル夫人に哀訴した。元來この『租稅論』は一七六〇年七月にミラボオ侯が弟の大法官ミラボオ Jean Antoine Riqueti Mirabeau に宛てた書簡に徵するも、亦、巴里の國立文書保管所に現存する其原稿を觀察するも、少なからざるケネエの加筆修正によりて成るものであり、一七七六年ミラボオ侯夫人は法廷に於てこの『租稅論』はミラボオ侯の著作でなくケネエ博士の著はしたものであると主張して居り、當時の批評家グリム Grimm は同年九月十五日に「此の夫人の言はこの書を故ケネエ博士に歸する一般の風評を是認したものである。」("Corres pondence" p. 240) と記述してゐる。從つて、このミラボオ侯の筆禍に就てはケネエ自身、危險も感じ、又責任を痛感せるものと考へられるが、シエルは、この時、ケネエは經濟表初版本を回收し破棄せるものと推定してゐる。("le D cteur" p. 282)

一方、ミラボオ法官を眷顧せる寵妃は其兄の不幸を憐れみ、係官を呼びて事情を尋ね、ケネエの辯疎を聽き、國王の一通りならぬ怒を和らぐるに努力した。("OEuvres," p. 130-132) 斯くて、ミラボオ侯は十二月二十四日の夕禁錮を免ぜられ、巴里より約二十里隔たりたる彼の所領地たるビグノオ Bignon に流謫せらるゝことゝなつた。オンケンは、禁錮せられたるは十九日夕より二十四日迄の五日間であり、其謫居は二ケ月間であつたと做し、("OEuvres" p. 131. note i) シエルも其說を認めてゐるが ("le D cteur p. 279. note i) ロメニイは、十二月十六日附のミラボオ侯のミラボオ法官宛書簡を引證して、同日夕刻より二十四日迄の八日間禁錮せられたのと推定し ("Les Mirabeaus" t. II. p. 226) ウオルスもこの說を採用し、禁錮は八日間にして其謫居は三ケ月間繼續せるものであると記述する。("le Mouvement" t. I. p. 75)

然しながら、不屈不撓なる師ケネエと、其忠實なる門弟ミラボオ侯とは、前記の經濟表の解說書の不評にも亦この『租稅論』の筆禍にも屈することなく、更に改めて經濟表の一層詳細なる解說を企圖し、ミラボオ侯は謫居の中に、既に之に著手し草稿を送つてケネエの批判、修正を求めてゐる。(巴里、國立文書保管所ミラボオ侯遺文書M 七八四、第三束中の書簡、M 七七九、第四號文書第一、第二文書『大經濟表』Grand Tableau Economique と表題せらるゝ原稿參照) ミラボオ侯は一七七〇年三月三十一日附、バアデン邊境侯宛書信にて「予が當時唯一人の門人として師事せる經濟表の發明者にして、且つ該科學の最初の師たりしケネエ氏は經濟表並に其凡ゆる結論の最も

發達せる解說、即ち該科學の寶庫 le trésor de la science とも稱し得べき大著述をなすに當りて予を使用した。」(Kenies "Correspondance de Mirabeau et de Dupont avec le margrave et prince héréditaire de Bade" t. I. p. 22) と述べて居る。而も、ミラボオ侯は、第三卷以後、遂次に卷を重ねたる彼の『人間の友』は、最初より一定の計畫の下に論述せられたものでなく、從つて、其立論は首尾一貫せざる缺點を有するを自ら認め、其凡べての原則並に推論を的確にして、經濟學を形成する本質的にして、自明なる智識を一定の秩序の下に、展開し、之を一つの完全なる學說體系に整備するの要ありと感じケネエが經濟表第二版の彫刻版刷の表の上部に揭記せる十二の考察事項 Objets à considérer の順序に從つてこれを行はんとしたのである。("Philosophie rurale"-Préface p. xxii; t. I. p.xlv-xlvii)

『租稅論』告發より二ケ年半の後、漸く政府が政治經濟學に獻身する人々の努力を好意を以つて觀察するを證明したのはラ・ツウル、Roussel de La Tour の『國家の富』"Richesse de l'Etat" が一七六三年五月刊行せられた以後のことである。斯くて、ケネエとミラボオ侯とにより準備せられたる經濟表の詳解はケネエの愼重なる配慮によりて『農業哲學』"Philosophie rurale" と題され、副題として、『國家の繁榮を確保する物的並に心的法則に據る恒久不變の秩序となれる農業の一般的原理及び經濟的統治』économie générale et politique de l'agriculture, reduite à l'ordre immuable des loix phisiques et morales, qui assurente la prosperité des Empires" と記され一七六三年十一月、アムステルダムより四折判一冊本、及び十二折判三卷として刊行せられた。而も尙、一時禁止せられたが幸にも翌一七六四年再び許可せられ、十二折判三卷として發行せられた。

然しながら、この『農業哲學』は、既に其序文に注意せる如く、其草案の一寫本より印刷に附せられたるもので多くの誤謬が存するものであり、("Philosphie rurale" p. xxiv) ミラボオ侯も、彼自身直接關係することなく、秘かに出版せられたるこの『農業哲學』には誤謬もあり、冗漫の點もあり、加ふるに、經濟表を發明せる天才（ケネエ）の深遠なる理論と、彼自身の文體とが奇妙なる對立をなして一體に溶合し居らざるを認め、尙、其上に印刷者の無數の誤りが存することを注意し、(Schelle "Le Docteur p. 299) 又「手記の不完全、論斷の深遠及び抽象的方法に伴ふ曖昧にして何等統一なき印象は、この著作をして一般讀者に愈々難解にして、餘りにも深遠なるものたらしめた。」(Kenies "Correspondance de Mirabeau et de Dupont avec le margrave et le prince hereditaire de Bade" t. I. p. 22) と書信してゐる。

デュポンより、この『農業哲學』を贈られたるボオドオ Abbé Baudeau は二十四時間內に重農主義に轉向したと傳へらるゝが、(Lomenie "Les Mirabeaus" t. II. p. 250) 後年、彼も、『農業哲學』は「洵に興味を感ずること少なき著作である。』と述べてゐる。(Schelle "Le Docteur" p. 299) 從つて、シェルは「重農主義經濟學徒の告白によるも同書は極めて晦澁なるものである。」と做す。

當時の批評家グリムは、後日に於てはこの書を重農主義經濟學徒の『モオゼの五書』Pentateuque と稱せるも ("Correspondence, éd par Tourneux, t. VII. p. 234-235) 一七六四年二月十五日の批評に於ては、「此書は不可解の話を熱心に極めて獨斷的に記述せるものに過ぎないと一般に評さるゝも、それは單に平凡な觀念を謎の樣な方法で著述せるものに外ならない。」("Correspondence," t. V. p. 458) と酷評を下してゐる。

「計算は人間の貨幣上の利益を守護する天使であり、最後の審判の判事である」と做し、經濟學の理論が計算に

よりて確證せられない時は、それは曖昧なる思ひ附きに過ぎないものであり、斯の如き意見の實施は災害となるものであるとのケネエの主張（巴里の國立文書保管所のミラボオ侯遺文書M七八四第三束中のケネエの書簡—Schelle "le Docteur," p. 396. 參照）に據りてミラボオ侯は『農業哲學』の序文に於て、經濟學に在りて、計算は人體に於ける骨格に比すべきものであると斷じ「經濟科學は經驗や推理で深められ擴げらるゝも計算を缺く時は、それは不確實にして曖昧なるものであり、到る處に於て誤謬と偏見とを記述するものである」（"Philosophie rurale, p. xli-xlii）と論じて、其本文に多くの計算と其算術的公式としての經濟諸表を記載したのであるが、この書に對する社會の非難と彼自身の不滿から、彼は、組織的に論述し、冗文を削除する如きは其任に非ざるも、『農業哲學』の處論には當然最も精通するものであるが故に其提要を著はす可き最適任者であるとの確信の下に、『農業哲學綱要』"Eléments de la Philosophie rurale" を起稿し、一七六七年和蘭のハーグ Haye（實は Lille）より發行した。

一方、『商業雜誌』Gazette du Commerce の月刊附錄『農商財政雜誌』Journal de lAgricultare, du Commerce et des Finances の專任編輯者となつたデュポンは彼が最初に編輯する一七六五年九月十五日發行の號に自ら質問の形式で經濟表の原理の註釋を揭載したが、圖らずも、この商工業者を不生產階級に區分する經濟表の原理と、工業並に商業は生產階級によりて再生產せらるゝ農產物の賣上總額を何等增加するものでないと言ふデュポンの註釋の論旨とは、不生產的と目されたる商工業者の激烈なる抗議を惹起し、又相反する立場に立つ經濟學者フォルボンネエ Forbonnais, モントウドゥアン Montaudouin 等は執拗に之を論駁した。而して、年餘に恆るこの烈しき論爭の間に共起因となれる經濟表の簡明にして、出來得るならば通俗の言語による解說を讀者の多くより要求せられたデュポンは經濟表の發明者たるケネエに、斯くの如き讀者の願望を通告するの義務を感じ且つ斯の如き重要なる仕事は最善の方法を以つて行はる可きであると做して、其解說の執筆を經濟表の發明者ケネエに需めた。（"OEuvres," p. 442—Dupont "Avis du lecteur" 參照）

斯くて、ケネエは『農業哲學』第七章に於て計算を試みたる佛蘭西の最高限度にまで發達せる農業狀態を前提として『經濟表の分析』"Analyse du Tableau économique" と題する一文を草し、これに關する『重要考察』Observations importantes 七項と共に一七六六年『農商財政雜誌』六月號に寄稿した。これは十二折判で十頁を超ゆるものでなく、『重要考察』の二十頁を含めて約三十頁のものであつた。」（"OEuvres" p. 307 note）然しながら、デュポンが一七六七年十一月に刊行した最初の重農主義經濟學論集としての『フィジオクラシイ』"Physiocratie, ou Consitution naturelle du gouvernement le plus avantageux au gene humain, Pekin" 第一卷に編纂されるに當りて、更にそれはケネエ自身によりて二倍に增補せられ『重要考察』を含めて約四十頁のものとなつた。（"OEuvres" p. 308 note）正確に言へば『經濟表の分析』は『フィジオクラシイ』第一卷四十三頁より六十五頁迄の二十二頁であり、『重要考察』は其六十七頁より九十八頁に至る三十二頁である。オンケンの考證に據れば、『農商財政雜誌』に揭載されたものは論集『フィジオクラシイ』に編纂されたるものゝ第六節目（"Physiocratie" t. I. p. 47.）三行目：OEuvres p. 309. 九行目：岩波文庫『經濟表』四十六頁七行目）より始まるもので、又『要約』中に示めされた一圖式書より引用せるソクラテスの語句と農業國々民の三階級の說明を缺くもので、又『要約』中に示めされた一圖式un figure 即ち「經濟表の範式」Formule de Tableau économique も記載せらるゝことがなかつたもので、それはデュポンの『摘要錄』Notice abregée の記述によるも推察し得る。この論集『フィジオクラシイ』の『經濟表の分析』は一八四六年刊行のディア Dare 編修の『フィジオクラアト』"Physiocrates" の第一卷に、又一八八八年の

オンケン編修の『ケネエの著作集』"OEuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay" に再錄せられた。更に、『佛蘭西內外經濟袖珍文庫』"Petite bibliothéque économique française et étrangère" の一冊として一八九六年刊行せられたギヨオ Yves Guyot 編纂の "Quesnay et la physiocratie" にも編入せられて居り、一九一一年、ドルン Valentine Dorn の手に成るケネエ著作の獨逸譯書 "Francois Quesnay, Allgemeine Grundsätze der wirtschaftlichen Regierung eines ackerbautreibenden, Reiches" にも編修せる。吾が國に於ては山口正太郎博士によりて邦譯せられ雜誌『我等』の昭和二年十一月號に揭載せられ、更に戸田正雄氏による邦譯は增井幸雄博士校閲の下に、昭和八年十一月發行の岩波文庫九五一『ケネー經濟察』の後半に『重要考察』と共に加へられる。

ケネエは其當時、佛蘭西に在りては、僅かに六百萬アルパンの耕地に實施せらるゝに過ぎなかつた大規模耕作が『穀物』論及び經濟表初版にては、佛蘭西の良地三千萬アルパンに、經濟表第二、第三版並に、ミラボオ侯『經濟表と其解說』にては佛蘭西當時の耕地四千萬アルパンに、實施せらるゝ如き農業再建の狀態を前提としたのであるが、既に斯くの如き大規模耕作は佛蘭西に於ては五十億乃至六十億の投資を以つて六千萬アルパンの土地に擴張し得ることを注意したのである。("Tableau OEconomique by F. Quesnay" p. viii: "L'Ami des Hommes," t. VII. p. 64) 斯くて、ミラボオ侯の『租稅論』にては、佛蘭西の農業が全般的に資本によりて有利に經營せらるゝ時、耕地六千萬アルパンの純收益を十一億五千三百二十五萬リーヴルと計算し、之に秣場・森林・葡萄園の純收益を加算して、其主要なる不動產四種の純收益總額を十九億三千二十五萬リーヴルと算定し、この計算は何等の誇張を包含するものでないと力說する。("Théorie de l'impôt p. 255) 而して『農業哲學』の七章「諸支出相互の關係」に於ては、佛蘭西の農業が最高限度に發達して、大規模耕作が六千萬アルパンに實施せられ、其他、各種農業が最も發展する時の夫々の投資並に其收益を算出するが、それはデュポンの未刊行の記錄によれば全くケネエの筆になるものと言はれる。(Schelle "Dupont de Nemoure et l'école physiocratique, 1888" P. 24) 從つて、『農業哲學綱要』に於ては他の總べての計算は削除せられたが、この綱要』にとミラボオ侯によりて記述せられて居る。("Eléments"—Descours préliminaire, p. 106) 而も、『農業哲學』並に『農業哲學 綱要』に挿入せらるゝ經濟表に、註を以つて、其「第七章を讀み終る以前に於て表を理解せんと努力するの要なし」と記入するが故に、先づこの第七章の計算のみは其內容が不可缺のものなれば除き得なかつた又『經濟表の分析』の前提となる佛蘭西の農業が最高限度に發達せる具體的事情であると考へられる。

(一)大規模耕作地六千萬アルパンの投資並に收益

ケネエは『小作人』論にて、佛蘭西王國の領土は約一億二千五百アルパンは存在するものとせるが、『大百科全書』の編者の註として、佛蘭西の最初の地圖たるセザアルーフランスワ・カツシニ・ヅ・テュリ César-Francois Cassini de Thury 作製の大地圖に據れば佛蘭西には約一億二千五百萬アルパンの土地があり、その半ばは麥のために耕作し得ると記載する。(Encyclopédie t. VI. p. 535: t. VII. p. 818: "OEuvres." p. 175: p. 207) 又、ミラボオ侯の『租稅論』には王國の領土約一億三千萬アルパンにして、其の半分、約六千五百萬アルパンは、六千萬アルパンと少なく見積られて穀物の耕作地となり得ると做したが (Théorie de l'impôt. p. 239) 『農業哲學』並に『綱要』に在りては、「佛蘭西王國の如く一億二千萬乃至三千萬アルパンを占める領土にては、鋤によりて耕作し得

る土地は六千萬アルパンである。」（"Philosophie rurale" t. I. p. 359：" Elémens " p. 143）と推定し、『經濟表の分析』に於ては、前提とせる一農業國の地域は種々異なれる性質の土地より成る廣さ約一億三千萬アルパンであるとする。（"Physiocratie" t. I. p. 47："OEuvres," p. 309：岩波文庫『經濟表』四六頁註）

而して『農業哲學』並に其『綱要』に在りては、其領土の約二分ノ一に當る六千萬アルパンに大規模耕作が行はるゝものと做し、平均百二十アルパンの土地を輪耕する馬の鋤一挺の播種を除く年々の收益は、一セチエの小麥十八リーヴル、裸麥十二リーヴル、燕麥十リーヴルとして、平均五千五百リーヴルと算出し、從つて馬の鋤五十萬挺にて耕作せらるゝ六千萬アルパンの原投資五十億リーヴル、年投資十億七千萬リーヴルにて、播種を除く總收益は二十七億五千萬リーヴルと計算する。（"Philosophie rurale" p. 130-132：t. I. p. 365-370：" Elémens" p. 150-155）

（二）耕作以外の農業及び廣義農業全般の投資並に收益

『農業哲學』並に其『綱要』に於ては、前記の耕作以外に、葡萄園・森林・秣場・鑛業・漁業・家畜等の投資並に收益を夫々算出し、更に此等の農産物を取扱ふ商業の投資並に收益を計算する。

此等の原投資額は四十八億四千萬リーヴルとなり、耕作の原投資五十億リーヴルを含めて廣義農業全般の原投資額は九十八億四千萬リーヴルとなる。これを概算して百億とすれば次の年投資（概算して二十億）の五倍となる。又經濟表にて除外せらるゝ農產物商業の原投資二十億リーヴルを除く原投資額七十八億四千萬リーヴルを概算して八十億リーヴルとすれば、純收益を殘す農業の原投資額は、この年投資額の四倍となり次に考察する『農業哲學』第九章の計算（"Philosophie rurale, p. 286：t. II p. 354）に一致することゝなる（"Philosophie rurale," p. 132-137：t. I. p. 369-384："Elemens, p. 155-169）

次に、耕作以の廣義農業の年投資は十五億五千萬リーヴルとなり、前記の耕作の年投資十億七千萬リーヴルを加へくれば、農業全般の年投資額は二十六億二千百萬リーヴルとなるが經濟表の對象となる純收益を再生產する年投資額は、十九億二千百萬リーヴルとなる。これを次の如く純收益額と對比して二十億リーヴルと概算する。（"Philosophie rurale" p. 138：t. I. p. 385："Elemens," p. 171.）

斯くて、耕作以外の總收益額三十六億一千七百二十萬リーヴルに、耕作の總收益二十七億五千萬リーヴルを加算して廣義農業全般の年々の總收益額は六十三億六千七百二十萬リーヴルと計算される。（"Philosophie rurale" p. 139：t. I. p. 386："Elemens," p. 172）斯くてケネェは『經濟表の分析』に、農產物の年々の再生產額を五十億とし、これに附屬する『重要考察』百二十萬リーヴル、概算して五十億リーヴルとなる。（"Philosophie rurale" p. 139：t. I. p. 386："Elemens," p. 172）斯くてケネェは『經濟表の分析』に、農產物の年々の再生產額を五十億とし、これに附屬する『重要考察』の第四考察中に「一國民の支出の分配の更に詳細なる吟味に進まんとするならば、『農業哲學』の第七章にそれを見出すであらう。國民の配分をこゝに形るところの五十億のほかに、他の支出があることを同書に見るであらう。そは、取引の費用及び、耕作に用ひらるゝ勞働獸の飼糧の如きものである。この支出は經濟表のうちに示されに支出の分配に含まれてゐないが、これを加へると年再生の總價値は六十三億七千萬（『農業哲學』に於ては前記の如く六十三億六千七百二十萬）に上る。」（"Physipcratie" t. I. p. 77："OEuvres," p. 320：岩波文庫『經濟表』六四頁）と記述するのである。

故に、『農業哲學』並に其『綱要』及び『經濟表の分析』の前提となる佛蘭西の農業が最高限度に到達せる狀態に於ける其投資並に收益は次の如くなる。

『農業哲學』並に其『綱要』	投資と收益	大規模耕作六千萬アルパン	『農業哲學』概算並に『經濟表の分析』
		其他の純收益を生ずる農業	純收益を生ずる農業全般
	原投資	五十億	
	年支出 年投資	四十八億四千萬	九十八億四千萬 (1) 百億
	年支出 年投資利子	八億五千萬	十九億二千百萬 (2) 二十億
	年支出 原投資利子	三億七千七百二十萬	九億八千五百二十萬 十億
	年支出 年投資利子	二億八千四百萬	七億八千四百萬 (3) 八億 (4)
	年支出	九千三百二十萬	二億百二十萬 (5) 二億
	總收益	十二億三千七百二十萬	二十九億六百二十萬 三十億
	總收益 年支出回收	二十一億五千七百三十萬	四十九億七百二十萬 五十億
	總收益 純收益	十二億三千七百二十萬	二十九億六百二十萬 三十億
		九億三千萬	二十億百萬 二十億
	地主階級所得 地主純所得	五億三千百萬	十一億四千三百萬 (6) 十一億四千二百萬 (6)
		二億六千六百萬	五億七千二百萬 五億七千二百萬
	租稅	一億三千三百萬	二億八千六百萬 二億八千六百萬
	十分ノ一稅	一億五千三百萬	

"Philosophie rurale p. 138 : t. I. p. 385,

"Éléments de la Philosophie rurale," p. 170-171.

"Physiocratie," t. I. p. 46-48 : "OEuvres" p. 309-310.

註 (1) 廣義農業の原投資總額

註 (2) 純收益を殘す農業の年投資額

註 (3) 廣義農業の原投資より農產物取引に使用さるゝ原投資二十億を除く七十八億四千萬の一割

註 (4) 前記の原投資七十八億四千萬を概算せる八十億の一割

註 (5) 純收益を再生產する農業の年投資の利子一億五千八百萬に其年投資に加算せられざりし、森林・秣場の經營者の生活費四千三百二十萬を加算す。

註 (6) 租稅を五億七千二百萬とすれば地主の純所得は十一億四千四百萬となる ("Physiocratie" t. I. p. 53 :" OEuvres" p. 311 : 岩波文庫『經濟表』四九頁) 然しながら『農業哲學』にては所得總額を二十億百萬とすればこれを十一億四千三百萬とし、『經濟表の分析』に於ては、所得總額を二十億とするが故に、これを十一億四千二百萬とする。

既に、ミラボオ侯の『經濟表と其解說』の第二表 ("L'Ami des Hommes," t. VII. p. 42) に於て、地主の純所得に租稅並に十分ノ一稅を加算した地主階級の所得總額十億五千萬リーヴルの百萬ノ一を各階級の諸支出の基本としたのであるが、『農業哲學』並に其『綱要』に在りては、其第七章にて、佛蘭西の農業が最高限度に達せる時の其純收益即ち地主階級の所得總額は二十億百萬リーヴルの百萬分ノ一の二千リーヴルを經濟表 (大表) 及び其略表 Tableau abrégée, Petits Tableau en précis ("Philosophie rurale, p. 44. p. 116 : t. I. p. 123. p. 327) 又は其略式 Formule abrégé du Tableau Economique ("Eléments de la Philosophie rurale," p. 47) の基本とし、『經濟表の分析』に於ては其概算二十億 (フラン) を其のまゝ、經濟表の範式 Formule du Tableau Economique ("Physiocratie" t. I. p. 65 : "OEuvres" p. 316 : 岩波文庫『經濟表』五六頁) の基本と

なす。

尙、『農業哲學』には、諸經濟問題解答のために描ける「省略せられたる原表」四表と、「略表」二十一表を記載し、論集『フィジオクラシイ』には範式の利用四表を掲載する。

四

斯くの如く、ケネエの手記する經濟表初版本の表の原稿と推定せらるゝ經濟表 Tableau OEconomique（地主一戸平均の純所得四百リーヴルを基本とするもの、）經濟表第二版本の彫刻版刷の經濟表 Tableau Economique、其活版刷の表 Tableau OEconomique. 第三版本の經濟表、及びミラボオ侯『經濟表と其解說』の第一表、（以上いづれも地主一戸平均の純所得六百リーヴルを基本とする四表）、又、其第二表（地主一戸平均の純所得に租稅、十分ノ一稅を加算せる所得一千五十リーヴルを基本とするもの）、更に、『農業哲學』並に其『綱要』に挿入せらるゝ大表（地主階級一戸平均の所得二千リーヴルを基本とするもの）及び、同じく地主階級の所得二千リーヴルを基本とする其略表、或は略式、『輕濟表の分析』の經濟表の範式（地主階級の總所得二十億フランを基本とするもの）は、いづれも佛蘭西の農業が再建又は、最高限度に發達せる夫々の狀態を前提とするものである。然るに、佛蘭西の農業の當時の狀況は、ケネエが、『穀物』論にて分析する處によれば、大規模耕作は、僅かに六百萬アルパンに實施せられるに過ぎずして、小規模耕作地三千萬アルパンの收益と加算しても、其總收益は、五億九千五百萬（久保田明光敎授は『近世經濟學の生成過程』百八十九頁の註に六億百八十萬と修正するが筆者が正確に算出すれば六億三百萬）リーヴルに過ぎず（"Encyclopédie," t. VII. p. 816 : "OEuvres," p. 206）又、ミラボオ侯の『租稅論』にては、この耕作地三千六百萬アルパンの收益は、五億八千九百五十萬（筆者が正確に算出すれば五億八千九百三十三萬三千三百三十三リーヴル餘）と算出する。（"Théorie de l'impot," p. 219）然らば、斯く疲弊せる農業の現狀が、如何なる方策によりて、經濟表が前提とせる大規模耕作が、三千萬アルパンに、四千萬アルパンに、更に又、六千萬アルパン迄にも實施せらるゝ如くに、農業が再建され、發展し得ると考察せるものであらうか。それに就て先づ『農業哲學』第九章にて論述する處を檢討することゝす。

(一)『農業哲學』第九章「農業と其諸支出との關係」

『農業哲學』第九章「農業と其諸支出との關係」中に記述せらるゝ一農業協會に提出されたる一文を檢討するに、先づ、大百科全書の『穀物』の項を參照すべきことを注意するが、當時の耕作地三千六百萬アルパンの收穫より得らるゝ地主階級の所得に就て、『穀物』論にては、小作料七千六百五十萬リーヴル、直接稅二千六百萬リーヴル、十分ノ一稅五千萬リーヴルと算定せるが、（"Encyclopédie" t. VII p. 816 : "OEuvres," p. 206）『農業哲學』に在りては、小作料を七千六百萬リーヴルとし、一切の直接稅を其の二分ノ一の三千八百萬リーヴルと修正し、十分ノ一稅を其儘五千萬リーヴルとし、斯くて、此等の所得を地主階級に齎らし得る農業の純收益は一億六千四百萬リーヴルとなるが、『農業哲學』にては之に、其小作人の利益即ち生活費二千七百五十萬リーヴルを加算した四億四千二百五十萬（ミラボオ侯『租稅論』にてはこの合計を經費とし、四億四千二百萬とす）を四億五千萬リーヴルと概算し、之を年投資とし、其四倍の十八億リーヴルを原投資とする。加ふるに『穀物』論にては考慮せられなかつた投資の利子、並に、間接諸稅、夫役等の負擔が六億四千六百萬リーヴル、『租稅論』にて、五億八千九百五十萬リーヴルと計算せられ斯くて、『穀物』論にて、五億九千五百萬リーヴルと計算せられ

たる當時の耕作地三千六百萬アルパンの總收益は、『農業哲學』にては十二億六千萬リーヴルと算定せられ其純收益は、年投資の約三十五パーセントの一億六千四百萬リーヴルとなるものとする。

而して、各種の小麥一セチエの平均價格十四リーヴルとすれば、この總收益十二億六千萬リーヴルは小麥九千萬セチエと見積り得るものであるが、今、農產物取引の完全なる自由、即ち穀物の輸出の許可によりて、穀價が騰貴し、小麥一セチエが平均十八リーヴルに維持せらるゝならば其總收穫は約十六億二千萬リーヴルと計算され得る。

而もこれを投資より算出すれば其年投資は約六分ノ一增加して、五億五千萬リーヴルとなり、原投資は其四倍の二十二億リーヴルとなるものとして其總收益は、十六億四千四百萬リーヴルと算定される。而して、純收益は三億八千四百萬リーヴルとなり、其年投資の約七十パーセントとなる。

次いで、間接諸稅、夫役等が廢止せらるゝならば、その負擔四億一千五百萬リーヴルだけ年投資が增加し得て、九億六千五百萬リーヴルとなり、其原投資は年投資の四倍、三十八億六千萬リーヴルとなれば、年々再生產せらるゝ總收益は二十四億一千二百萬リーヴルとなるものとする。斯くて純收益は九億六千五百萬リーヴルとなり、其年投資の百パーセントとなる。

而して、土地賃貸契約は其契約期間を一般に九ケ年と定むるを以つて、年々更新せらるゝは、平均其九分ノ一に過ぎず、從つて、凡べての農業經營者の純收益が增加するも、その增加額の九分ノ一づゝが、地主の所得の增加となるのみにて、增加せる其他の純收益は農業經營者の手元に殘りて、原投資と年投資との比率四對一の割合にて、原投資並に年投資を增加するものと假定して『農業哲學』に各年度の投資の增加過程を表にて示す。（"Philosophie rurale" p. 290 : t. II. p. 366）

この表の計算に在りては、土地賃貸契約の凡べてが更新せらるゝ穀物の輸出が許可せられてより十年目、年投資は十五億一千八百萬（筆者の計算にては十五億二千二百萬）リーヴル增加し得ることゝなるが諸事情を考慮すれば其一割、一億五千百萬リヴールが增加するものと算定するが至當であると做し、從つて、原投資の增加額は、其四倍の六億四百萬リーヴルとなり、斯くて增加せる原投資四十四億六千四百萬リーヴル、年投資十一億一千六百萬リーヴルにて、年々再生產せらるゝ總收益は二十七億九千萬リーヴルとなる。

斯く、當時、約三十五パーセントの純收益を擧ぐるに過ぎなかつた年投資は穀物の輸出許可による農產物價格の騰貴によりて、約七十パーセントの純收益を齎らすことゝなり、更に、間接諸稅並に夫役の廢止によりて、初めて、經濟表が前提とする佛蘭西の農業が再建せられたる時の如くに、百パーセントの純收益を年々生ずることゝなるのである。

又、この投資並に收益を『農業哲學』第七章の大規模耕作が實施せらるゝ狀態であつて、要するに、佛蘭西當時の佛蘭西の可耕地六千萬アルパンの全部に、大規模耕作地六千萬アルパンのそれと比較すれば、大體に於て、衰微せる農業が穀物の輸出許可と、間接稅・夫役等の廢止により十ケ年間にして、其最高限度に發達し得るものと考察せるものであることが立證し得らるゝのである。斯くて其投資並に收益を比較すれば次表の如くなる。

經濟表の生成發展

投資と收益	佛蘭西當時の實狀	穀物輸出許可の場合	間接稅・夫役等廢止の場合	土地賃貸契約の全部が更新し終りたる十ケ年目
原投資	十八億	三十八億六千萬		四十四億六千四百萬
年投資	二十二億			

年支出	年投資	四億五千萬	九億六千五百萬
	投資利子	六億四千六百萬	十一億一千六百萬
	原投資利子	七億一千萬	四億八千二百萬
	年投資利子		三億八千六百萬
年支出		十億九千六百萬	九千六百萬
總收益		十二億六千萬	十四億四千七百萬
總收益	年支出回收	十億九千六百萬	十四億四千七百萬
	純收益	一億六千四百萬	九億六千五百萬
地主所階級得	地主純所得	七千六百萬	五億二千四百萬
	租稅	三千八百萬	二億六千二百萬
	十分ノ一稅	五千萬	一億七千九百萬

年支出	年投資	十億九千六百萬	十六億七千四百萬
	投資利子	十二億六千萬	二十七億九千萬
	原投資利子	十億九千六百萬	十六億七千四百萬
	年投資利子	一億六千四百萬	十一億一千六百萬
總收益		十二億六千萬	二十七億九千萬
總收益	年支出回收	十億九千六百萬	十六億七千四百萬
	純收益	一億六千四百萬	十一億一千六百萬
地主所階級得	地主純所得	七千六百萬	五億二千四百萬
	租稅	三千八百萬	二億六千二百萬
	十分ノ一稅	五千萬	一億二千九百萬

而して、ケネェは一七六六年『農商財政雜誌』八月號に揭載せられたる『(第一) 經濟問題』"Problème économique" に於て、「穀物の輸出の自由と免稅とに依りて農產物の價格の六分ノ一が騰貴せる結果に就て」考究し、更に一七六七年の著作集『フイジョクラシイ』"Physiocratie" に初めて發表せられたる『第二經濟問題』"Seconde Problème économique" に於ては、「間接稅の諸結果を確證」したのであるが前述の『農業哲學』第九章の處論に最も近いのは次のデュポンの『穀物輸出入』論の計算

(一一)『穀物輸出入』論の計算

次に、デュポンの一七六四年の著『穀物輸出入』論 "De L'exportation et de L'importation des Grains" の處論を考察するに、前記の『農業哲學』の計算と同樣に、穀物の輸出の自由が穀價を騰貴せしめ、耕作の利益を增加し、其增加せる利益の一部が土地賃貸契約の凡べてが更新するに要する九ケ年間に耕作者の投資を增加し、斯くて、發展する農業の發達過程と、それに從つて增額する地主の所得增加の過程とを一表 (p. 46-47: édition par Depitre, p. 20-21) に表示する。

先づ、デュポンは、當時の小麥一セチエの價格十三リーヴル十ソル (表第一項) にては、大規模耕作地百二十アルパンの純收益は六百リーヴル (表第四項) であるが、穀物の輸出が許可せられてより土地賃貸契約が凡べて更新せらるゝ九ケ年間に、小麥一セチエの價格は十七リーヴル十二ソル (表第二項) となり、增加せる原投資一萬二千七百十三リーヴル (表第五項) 年投資二千六百七十八リーヴル (表第六項) によりて再生產せらるゝ總收益は六千百二十四リーヴル (表第三項) に增加し、而して、年支出は年投資二千六百七十八リーヴルに、投資の利子一千五百三十九リーヴル加算した四千二百十七リーヴルの純收益は一千九百七リーヴル (表第四項) となるものと做す。即ち、年投資二千六百七十八リーヴルの純收益率は約七十一パーセントとなる。然しながら、それは間接稅の負擔を考慮するが故である。即ちデュポンは其『穀物輸出入』論第二章に、大規模耕作地百二十アルパンの總收益は小麥一セチエの價格十八リーヴルとなる時、四千五百リーヴルとなり、それより年支出三千 (年投資二千、投資の利子一千) リーヴルを回收せる後の純收益は、年投資の七十五パーセントの一千五百リーヴルとなるものと做すが、それは間接的負擔の存在を前提とするが故であつて、それが廢止せらるゝ時、初めて、年投資の百パーセントの二千リーヴルとなるものとする。(p. 105: édition par Depitre, p. 48) 而も、之を『農業哲學』第七章並に『經

濟表の分析』にて算定せられたる全國の農業の純收益總額二十億リーヴルの百萬分ノ一を意味するものとすれば、デュポンも佛蘭西當時の農業の衰微せる狀態は、穀物輸出の許可と間接諸稅の廢止との方策により、最高度に到達し得るものと主張せんとするものであると考へられる。

十八世紀の初葉より佛蘭西王國朝野の識者に課せられたる、地方「農村の疲弊」と中央「財政の逼迫」との二大問題に對して、ケネエは「穀物輸出の自由」の許可と「土地收益單一課稅制度」の採用とを以つて答へ、之を經濟表に依り數字的に證明し、更に、それを所謂重農主義經濟學の體系にまで進展せしめたのである。而もケネエは「社會の秩序の自然的法則は人間の生活と保存と便宜に必要なる財貨の永久的再生產の物理的法則、そのものである。」（"OEuvres," p. 642）と做し、「この法則によりて、萬物は、生產物は、富は、その存續を維持し、更に其可及的最大量にまで增加し得るものである」。（"OEuvres," p. 441）と說くが、ミラボオ侯は、經濟表はこの自然法による社會の經濟的秩序を嚴正に表明せる公式に外ならぬものであると論ず。（"Philosophie rurale" t. II. p. 59）

山本勝市博士は「ケネー經濟表の種類に就いて」（『內外研究』第一卷第一號）に於て、經濟表の原表十一種、其略表五種ありとせられ、山口正太郎博士は「經濟表の研究」（『大阪商科大學經濟研究年報』第四號）にて、原表十二種に、其略表八種を加へて「ケネーの經濟表と世に稱せられるもの總てゝ二十種に上る。（同年報七八頁）と記述せらるゝが『農業哲學』に記載せられて、其序文に、「概括小表」Petits tableau en précis, と稱せられ、又其本文中に、略表 Tableau abrégée と呼ばるゝものは、ケネエの『經濟表の分析』の範式 Formule du Tableau Economique や、それと全く同一の機構のミラボオ侯の『農業哲學綱要』の略式 Formule abrégé du Tableau Economique とは根本的差異あるを以つて、筆者は、之を加算して、ケネエ並にミラボオ侯の手になる經濟表を別表の如く四十六表とし、其機構に於て原表・略表と範式の三種あるものと做す。更に、これを、佛蘭西の農業再建後の社會各階級の支出秩序を表示する基本表と經濟上の諸問題解決のために使用せる應用表とに區分すれば次の如くなる。

原表	基本表	九表	十七表
	應用表	八表	
略表	基本表	二表	二十三表
	應用表	二十一表	
範式	基本表	二表	四十六表
	應用表	四表	
		六表	

この外に、ボオドオは其『經濟表の解說』"Explication du Tablean Economom ique, à madame de * * *, Par L'Auteurs des Ephémérides," に『經濟表の分析』の範式が餘りにも簡單なるが故に、理解に困難なりとの非難により、それを三つの段階に分つ解說圖表三表（一般的圖表と、それに數字を記入するもの二表）を記載し、（Daire "Physiocrates" t. II. p. 864-866）又、ケネエの有力なる論敵であつたフォルボンネ F. Véron de Forbonnais

は其 "Principes et Observations économiques, Amsterdam, 1767" に『ラボオ侯の『經濟表と其解說』の第一、第二、第三、第五表を轉載して批判し、更にランゲ Simon-Nicolas-Henri Linguet は其の "Réponse aux Docteurs modernes ou Apologie pour L'Auteur de la Théorie des Loix, et des lettres sur cette théorie, avec le réfutation du système des philosophes Économistes, 1771," に『農業哲學』の經濟表原表を易經の六十四掛の圖と並記する一表を挿入し（同書第二卷三十頁と三十一頁間）「それは何れも理解し難きものであり、國民の敎育に危險を及ぼすものであり、又其本質上、禍となるものである。」（同書第二卷五頁）とし、要するに、「經濟表は夢想の所産であり、何人に對しても、幸福も、安穩も、保證するものでない。」（同書第二卷三三頁）と論難するが、此等反對論者の引用するもの、及び前記のボオドオの解說圖表を除いて、未發見の經濟表初版本に、其第二版本の活版刷の第二表と同一形式の一表のみを挿入するものと推定すれば經濟表は別表の如く四十六表となる。而して、それは、いづれも數字と點線とより成るものであるが、本稿にては、佛蘭西の農業再建後の經濟的秩序を表明する其基本的なるもの十三表の數字の根據を檢討して經濟表の生成發展の過程を明かにしたのである。次いで其點線にて示めさるゝ各機構の解說並に相互の關係に就ては、他日改めて考究するつもりである。

經濟表一覽

原	(1)	Manuscrit de. F. Quesnay - aux Archives Nationales. Paris - M. 784. No. 23	
	(2)	Première édition - Inconnu	
	(3)	Seconde édition - Première tableau- aux Archives Nationales Paris M. 784. No. 24,	
	(4)	Seconde édition - Seconde tableau - 〃	
	(5)	Troisiéme édition.	
	(6)	"L' Ami des Hommes."	t. 6.-suite, p-23 : t.7-p.19
	(7)	〃	t. 6-suite, p-51 : t.7-p-42
	(8)	〃	t. 6-suite, p.101 : t.7-p-84
	(9)	〃	t. 6-suite, p.119 : t.7-p.99
	(10)	〃	t. 6.-suite, p.131 : t.7-p.109
	(11)	〃	t. 6.-suite, p.185 : t.7-p.155
表	(12)	"Philosophie rurale"	
	(13)	"Elémens de la Philosophie rurale"	
省略された原表	(1)	"Philosophie rurale"	p.216 : t.2-P.174
	(2)	〃	p.216 : t.2-p.175
	(3)	〃	p.217 : t.2-p.176
	(4)	〃	p.226 : t.2-p.200

表			
*	(1)	"Philosophie rurale"	p. 44 : t.1-p.123
*	(2)	〃	p.116 : t.1-p.327
	(3)	〃	p.146 : t.1-p.405
	(4)	〃	p.147 : t.1-p.407
	(5)	〃	p.149 : t.1-p.410
	(6)	〃	p.211 : t.2-p.164
	(7)	〃	p.212 : t.2-p.165

附	(8)	〃	p.214 : t.2-p.169
	(9)	〃	p.215 : t.2-p.173
	(10)	〃	p.218 : t.2-p.179
	(11)	〃	p.220 : t.2-p.184
	(12)	〃	p.222 : t.2-p.189
	(13)	〃	p.239 : t.2-p.235
	(14)	〃	p.266 : t.2-p.305
	(15)	〃	p.267 : t.2-p.307
	(16)	〃	p.269 : t.2-p.312
	(17)	〃	p.270 : t.2-p.314
	(18)	〃	p.273 : t.2-p.321
	(19)	〃	p.293 : t.2-p.372
	(20)	〃	p.308 : t.3-p. 36
	(21)	〃	p.309 : t.3-p. 39
	(22)	〃	p.314 : t.3-p. 50
	(23)	〃	p.315 : t.3-p. 51

略	* (1)	"Physiocratie"	t. 1-p. 65 : "OEuvres"	p.316
	(2)	〃	t. 1-p.195 : 〃	p.500
	(3)	〃	t. 1-p.455 : 〃	p.702
	(4)	〃	t. 1-p.457 : 〃	p.703
	(5)	〃	t. 1-p.479 : 〃	p.712
	* (6)	"Elémens de la Philosophie rurale."		p. 74

表中*印を附せるものは佛國の農業再建後の基本的秩序を表示する基本表なり。

經濟表	計	內譯	
		基本表	應用表
原表	13	9	4
省略せられたる原表	4		4
略表	23	2	21
純式	6	2	4
合計	46	13	33